



養 護

第77号

2026年3月
秋田県養護教諭研究会
担当 大曲仙北支部

大曲仙北支部だより

大曲仙北支部は、大仙市・仙北市・美郷町の2市1町から構成され、現在55校、58名(小学校29名、中学校17名、高等学校9名、特別支援学校3名)の会員が所属しています。

2025年3月には大仙市・仙北市教育委員会より学校再編計画の素案が示され、大仙市では2032年度に小学校8校の統合、2031年度に中学校3校の統合が予定されています。仙北市では2028年度を目標に小・中学校でそれぞれの統合が進められる方針であり、支部としても会員数の減少が懸念される状況です。

令和4年度より「一人一役」の新体制を導入し、全会員が総務部・研修部・研究部のいずれかに所属する形で組織運営を行っています。また、これまで会員全員で取り組んできた研究活動については、会員アンケートの結果を基に、令和7年度からは研究推進班が中心となり、研究会で内容を共有する方式へと移行しました。統合型校務支援システムの導入により発育疾病統計の見直しが進められ、研究誌『しらぎく』の内容も、より精選されたものとなる予定です。支部の将来を見据えた前役員尽力により、新しい時代のニーズに応じた組織改編が実現したことに感謝し、今後は会員の減少や世代交代にも柔軟に対応し、持続可能な運営の在り方を模索してまいります。

令和7・8年度の研究テーマは「『統合型校務支援システムの活用により、業務の効率化を図る』～C4t hについて学び合い、業務に生かす～」と設定しました。大仙市では令和6年度よりC4t hの導入が始まり、令和7年度からは仙北市・美郷町でも導入され、支部全体で本格的な活用が進められています。導入時期の異なる市町間で情報を共有し、効率的な活用スキルの習得を目指しています。

今年度の夏季研修会では、「『統合型校務支援システム』と『A5ライセンスによる汎用クラウド』の使い倒しによる養護教諭のための校務DX」と題し、鳴門教育大学 教員養成DX推進機構長 特命教授 藤村裕一氏による講演が行われました。秋田県においてA5ライセンスという好条件が整っていること、そして高度な分析力を活かした教育改善が可能であることを理解し、私たち自身がこの劇的な変革を使いこなすことにより、教育環境の改善に大きく寄与し、子どもたちに寄り添う時間の確保につながると認識することができました。

夏季研修会の参加者からは、「『C4t hを使い慣れないから使いにくいと感じる』という先生の言葉に共感し、苦手意識を乗り越えたいと思った。」「Copilotの便利さに驚いた。積極的に使っていきたい。」「『難しそう、自分には無理』と感じていたが、講演を通じて『できそう』『やってみたい』に気持ちが変わった。」「DXによって、業務の効率化だけでなく、児童生徒への支援が充実することに感動した。」「保健室業務の効率化、校務連携の強化、児童生徒の健康状態のリアルタイム把握などC4t hやA Iの活用が保健活動に直結することを実感した。」「すぐ活用できる実践例を紹介していただいた。」「講師の先生の事例や活用方法の紹介を通して、A5ライセンスが単なる制度ではなく、現場での実践に深く関わるものであることを実感した。」「養護教諭への温かい励ましに前向きな気持ちになり、充実した時間となった。」「新しいことへの抵抗感が薄れ、挑戦してみようという意欲が高まった。』といった声が寄せられました。

今回の講演は、「統合型校務支援システムC4t h」への理解を深める貴重な機会となり、実践への足がかりとして期待されます。今後、会員によるC4t hの積極的な操作と、研究推進班による情報整理を通じて、「C4t h活用ガイド」の作成が進められる予定です。

これまで受け継がれてきた「仲間同士で学び合う力・先を見通す力・次へつなげていく力」をさらに高め、「令和7(なかよく)・8(ハッピーに)」を合言葉に、子どもたちの健やかな成長を願いながら、支部一丸となって歩みを進めてまいります。

(支部長 古村 香)

令和5・6年度 2年継続研究

生涯にわたり、健康でたくましく生きぬく子どもの育成
 ～現代的健康課題解決に向けた、養護教諭の実践力の向上を目指して～

1 はじめに

本支部の2年継続研究は、大曲仙北教育研究会の継続研究の一環として、養護教諭の資質向上を目的に2年を1サイクルとして行われている。令和4年度までは、地域連携を軸に11地区で研究を行ってきた。令和5・6年度は、令和4年度の研修で得た「評価の視点」を踏まえ、世代や地区を超えた養護教諭の関わりが組織や児童生徒にどのような変容をもたらすかを「仮説・実践・検証・評価」の一連の流れを軸として取り組んだ。「より効果のある実践」と「日々活用できる実践資料」を目指して研究を進めた。

2 実践内容

(1) テーマ別の実践研究

自校の健康課題を基に希望を募り、8つのグループに分かれてテーマ別研究を行った。

(2) 研究計画シートの活用

仮説・実践・検証・評価の見通しをもつために「研究計画シート」を活用した。

(3) 秋季研究会での発表

各グループがPowerPointやCanvaを活用し、10分間の中間発表を行い、付箋紙による質問と協議・回答を通じて理解を深めた。研究会後には「研究だより」を発行し、質問に対する詳細な回答を共有した。

| グループ名 | 研究テーマ |
|--------|-------------------------------------|
| 生活習慣A1 | 健康課題の解決に向けて意欲的にチャレンジする子どもを目指して |
| 生活習慣A2 | タブレットやチェック用紙を使用した実態把握から、行動変容を目指して |
| 生活習慣B | 睡眠に関する指導を通し、自分の健康課題を解決する意欲・態度を育む |
| 生活習慣C | 栄養のバランスを考えながら望ましい朝食を摂取しようとする子どもの育成 |
| 救急処置A | 掲示物を活用した救急処置対応～初期対応ができる子どもの育成を目指して～ |
| 救急処置B | 大曲仙北中学校体育連盟等～救護に関する種目別シート集の作成～ |
| 歯と口の健康 | 歯と口の健康に関心をもつために～効果的な指導方法を学び、探る～ |
| 心のケア | 読んで納得 試してガッテン 文献を活用した健康相談 |



3 結果と考察

アンケート結果から「世代や地区を超えた学び合い」「日頃の実践に活用できる・役立てる」の項目で肯定的な回答が得られた。また、「研究で作成した資料を、他校でも活用できそうなものは共有したい」との声があり、気軽に活用できる実践資料データの共有をすることができた。会員同士の学び合いができたこと、実践を共有できたことが大きな成果といえる。

一方で「成果を感じる（変容を見取る）」の項目で、行動変容や習慣化の評価が難しいとの声があり、より効果的な実践には「評価の視点」を意識した継続的な取り組みが必要とされた。

今後も同じ課題をもつ養護教諭同士で課題や方法を吟味し、効果的な実践の共有を通して研究を深化させていくことが重要である。

4 おわりに

児童生徒の健康課題解決のため、地区やテーマ別の形態で一人一研究に取り組んできた。「子どもたちをよくしたい」「現状をよりよくしたい」という思いが、2年継続研究を通して実践力の向上につながっている。

研究によって得られた知見や資料は日常業務に活用され、より効果的な実践を目指すことができている。令和7年度から一人一研究の形態は変わるが、多様化する健康課題への対応は継続して求められる。児童生徒の健やかな成長を支える存在として、世代や地区を超えた学び合いを組織の力とし、さらなる実践力の向上に努めていきたい。
 (文責 角館中学校 高階 桃子)

テーマ別研究

歯と口の健康に関心をもつために ～効果的な指導方法を学び、探る～

歯と口の健康グループ

1 はじめに

毎年の健康診断では、歯と口の健康に関心が高く全て健全歯である児童がいる一方で、未処置歯を複数保有する児童や、治療した歯がすぐにう歯になる児童がいるなど、二極化の傾向がみられていた。そこで共通の健康課題解決に向けて、各校の歯科保健指導をレベルアップさせることを目的に、養護教諭が効果的に指導することで児童生徒が歯と口の健康に新たな興味・関心をもち、継続的な実践につながると考え、本グループで研修や歯科保健指導を実施した。

2 実践内容

(1) 養護教諭のスキルアップ

① 専門家による歯科保健指導の学習

大仙保健所の歯科衛生士に依頼し、児童生徒へ歯みがき講座を実施した。より効果的な歯科保健指導の方法を学んだ。

② 大仙市授業支援ソフト活用研修への参加(令和6年1月)

歯科保健指導へICTを取り入れ、MetaMoJiを使用して学習シートを作成した。研修に参加し、MetaMoJiの基本操作を習得した。

③ MetaMoJi学習シートの作成

研修内容を活かし、各校で学習シートを作成した。様式は各校で異なるが、染め出し後の写真を貼り付けできるように統一した。作成した学習シートや歯科保健指導方法をグループで共有し、各校の実態に応じたアレンジを加えた実践を目指した。

(2) ICTを活用した歯科保健指導の実施

各校で作成したMetaMoJi学習シートを活用し、歯科保健指導を実施した。対象学年や指導形態は各校の実態に応じて異なるが、染め出し→みがき残し確認→写真撮影の流れを統一して指導した。

児童生徒はタブレット操作に慣れており、自分の歯を記録・撮影し、みがき残しの確認ができていた。操作が苦手な児童や低学年の児童には、養護教諭や学級担任が撮影の補助を行った。

歯みがき習慣の確立には、家庭との連携が不可欠であると考え、指導後に学習シートへ養護教諭からのコメントを入力・印刷して配付し、家庭との連携を図った。



3 結果と考察

指導後、みがき残しなく歯みがきをしようとする様子や、子ども同士で声をかけ合って歯みがきをする様子がみられた。写真による記録は、時間が経っても明確で、拡大して確認できるため振り返りに適していた。一方で、丁寧な歯みがきを継続的に意識しているかどうかの評価は困難であった。意識の変容を可視化する工夫として、学習シートに数値化による振り返りの項目を設けたり、記録の蓄積を活用したりすることで、成果を把握できる指導の継続が必要であると考えた。

4 おわりに

歯と口の健康は、生涯にわたって健康に過ごすための重要な要素である。今のうちに歯みがきの習慣と自分に合った歯みがきの方法を身に付けることは、今後の健康の保持・増進につながる。養護教諭として、今後も家庭と連携しながら歯と口の健康づくりを推進していきたい。

(文責 横堀小学校 鹿嶋 真菜)

テーマ別研究

大曲仙北中学校体育連盟等 ～救護に関する種目別シート集の作成～

救急処置Bグループ

1 はじめに

大曲仙北中学校体育連盟（以下、中体連）が主催する様々なスポーツ大会の救護は、中学校に所属する養護教諭が担当している。競技種目ごとの救護に関するルール等があり、その条件に応じた対応が求められるため、大きな不安を抱えながら業務に当たっている会員も多い。

令和6年度からは一部の大会で校種に関係なく輪番制で救護を担当することとなり、救護の現状把握と情報共有の必要性が高まった。そこで、「救護に関する種目別シート集の作成」に取り組み、会員の不安軽減と業務改善を目指した。

2 実践内容

- (1) 「救護に関する種目別シート集」の作成
会員へ救護に関するアンケートを実施し、各種目責任者へのルール確認、中体連会長による確認を行った。
- (2) シート集の配付と活用
会員や各種目責任者、中体連関係者、校長会で周知し、情報共有を図った。
- (3) 改訂版に向けた修正作業
評価アンケートの情報を反映し、会場写真を資料編として追加した。
- (4) 改訂版の発行
より実用的な内容に更新し、継続的な活用を促進した。



| 大曲仙北中学校体育連盟等 救護に関する種目別シート | | |
|---|-----------|------------------------------|
| 野 球 | | |
| 1 大会の時期及び会場 | | |
| 大会 | 会場 | 会場別に特に留意する事項 |
| 都市青年 | 神岡球場 | ・救護室あり。 |
| | 平和中グラウンド | ・救護スペースあり。(巻部陣) |
| | 西仙北中グラウンド | ・本部と救護が一緒の部屋のためかなり狭い救護スペース。 |
| 都市総体 | 大曲球場 | ・救護室あり。(救護担当者待機場所から離れた場所にあり) |
| | 落合球場 | ・救護スペースあり。 |
| | 神岡球場 | ・救護室あり。 |
| 都市新人 | 落合球場 | ・救護スペースあり。 |
| | 西明寺中グラウンド | ・本部と救護が一緒の部屋のためかなり狭い救護スペース。 |
| 2 集合時間等の連絡 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・勤務校の専門部の先生から連絡がある。必要天増延時の連絡含む ・確認のため勤務校の専門部の先生に自分で連絡をする。 | | |
| 3 会場に到着してからの動き | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・本部に挨拶をし、救護場所や救護担当者の待機場所の確認をする。 ・AEDや担架の場所を確認する。(手配や準備は専門部が行っている) ・水道、トイレ、救護室等の確認をする。 | | |
| 4 救護のタイミング | | |
| (1) 救護が必要となった場合の動き | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ケガ等の発生状況を確認しながら対応の準備をする。 ・専門部の先生からの指示を確認し対応する。 | | |
| (2) 救護に関する競技の特性やルール等 ※各競技の専門部に確認した内容 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ①審判が試合を止める。 ②専門部が確認し、救護担当者を呼ぶ。 ③応急処置時間は10分間。審判から残り時間を伝えられる。 ④タオルバスタオルの場合、ベンチに下げる。(臨時代走) ⑤医療機関に搬送の継続か、養護教諭と試合関係者で相談して決める。 | | |
| 5 携行品 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・救急バッグ(大) ・クーラーバッグ(小分け水) ・タオルバスタオル ・創傷処置キット ・霧吹きボトル ・コールドスプレー ・経口補水液 ・紙コップ ・ストロー ・うちわ ・ティッシュペーパー ・消毒用ウェットティッシュ | | |

3 結果と考察

「救護に関する種目別シート集」について、全会員が「参考になった」と回答し、活用場面では、「中体連救護」64.0%、「日常の救急処置等」48.0%と、日常的な活用も多く見られた。会員の経験や中体連関係者からの情報を基に作成したことで、実用性が高く、救護に対する不安軽減や業務改善に役立った。また、学校現場でも活用され、児童生徒への還元にもつながった。中体連関係者や校長会での周知により、役割の明確化と情報共有が進み、「救護に関する種目別シート集」をきっかけに関係者とのコミュニケーションが深まった。物品準備や協力体制の変容も見られ、実践的な成果が得られた。

4 おわりに

「救護に関する種目別シート集」は、令和7年度の大会救護でも活用されており、養護教諭の救護対応の質の向上に寄与している。児童生徒への日常的な還元も可能となり、今後は、部活動を取り巻く環境等の変化に応じて救護対応も柔軟に見直していく必要がある。

養護教諭同士や関係者との連携を深め、発信力や協力体制の構築力を更に磨いていきたい。

(文責 西明寺小学校 佐々木 登和子)

高等学校における特別支援教育の充実に向けて

大曲仙北養護教諭部会県立学校

1 はじめに

大曲仙北学校保健会高校部会では、令和元年度から「SENネット連絡会」を実施している。これは、様々な支援が必要な生徒と関わる機会の多い養護教諭が、高等学校支援チームの教育専門監等と情報交換やケース会議等を行い、支援方法を共有している場である。

2 実践内容

(1) 夏季研修会

日時：令和6年8月5日（月）

内容：講義「読み書きに困難のある生徒の理解について～『読む』とは～」

特別な支援を要する生徒に関する事例検討

講師：大曲支援学校 教育専門監 大川 康博 氏

横手支援学校 教育専門監 菅原 咲希子 氏

(2) 冬季研修会

日時：令和7年1月8日（水）

内容：講義「高校生年代の発達障害の特性&サポート」

特別な支援を要する生徒に関する事例検討

講師：秋田県発達障害者支援センターふきのとう秋田相談員 大越 杏紗 氏



3 結果と考察

講義を通して、生徒がどの力に苦手さを抱えているかを十分にアセスメントし、適切な支援方法を検討する必要性を再認識した。養護教諭は授業をもたない場合が多く、本人に直接支援することが難しいため、学習意欲が低下し保健室を利用する生徒の背景に発達障害特性が関係していないかを、担任や教科担任等と情報共有しながら検討することが重要である。また、本人が自信を喪失しないよう、温かく共感的な関わりをもつことの大切さも認識された。

発達障害をもつ生徒への支援においては、特性に応じた対策が分かっていたら適応できる可能性は高く、二次障害の予防につながる事が明らかとなった。一方で、適切な支援がない場合には、失敗や叱責の経験が重なり、「どうせ自分は何をやってもダメなんだ」と自信を失い、不登校や引きこもりなどの不適応状態に陥るリスクがあることも示された。

今後の支援においては、生徒が自分の苦手を理解し、「～のようなサポートがあればできる」という成功体験を積むことができるような環境づくりが求められる。また、今できていることに着目し、それを言葉にして評価することが、生徒の自己肯定感を高める上で効果的である。

事例検討では、「困ったときにHELPを出せる生徒に育てる」ことの重要性が確認された。卒業後、社会に出た際に、困ったときに周囲に声をかけ、相談し、助けを求めることは重要なソーシャルスキルである。しかし、遠慮や恥ずかしさ、相談のタイミングが分からないなどの理由で、助けを求められず不適応を起し、孤立してしまう場合もある。

学校では、相談できる場所や機会を明確にし、相談しやすい環境を整えるとともに、生徒自身が「思いきって相談したらうまくいった」という経験を積めるよう支援していくことが、今後の実践における重要な視点である。

4 おわりに

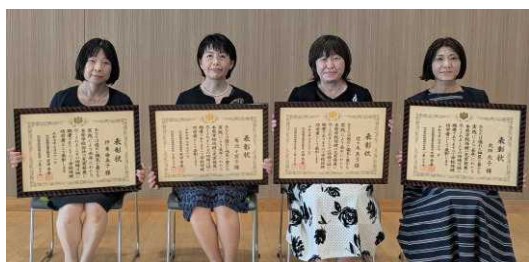
「SENネット連絡会」を通じて、特別支援教育について知見を深めることができた。発達障害をもつ生徒の中には心身の不調を訴え保健室を利用する生徒も多く、養護教諭は関係機関と連携・調整しやすい立場にある。特別支援教育コーディネーターとしての役割を担う中で、校内支援の推進に悩むこともあるが、「SENネット連絡会」は学び合いと相談の貴重な機会となっている。今後も研鑽を重ね、生徒支援の充実に努めたい。

(文責 大曲農業高等学校 齊藤 芽衣)

祝 受 賞

◇秋田県学校保健功労者表彰

※御写真左側より



皆様のますますの御活躍を祈念申し上げます

- 伊 東 由美子 先生
(潟上市立羽城中学校)
- 菊 池 千賀子 先生
(能代市立東雲中学校)
- 佐々木 真 弓 先生
(横手市立横手北小学校)
- 丸 岡 元 子 先生
(県立大館鳳鳴高等学校定時制課程)

令和7年度 新規採用養護教諭紹介 今年度12名が仲間入りしました

- | | |
|---------|---------------|
| 保 坂 怜 子 | 三種町立湖北小学校 |
| 森 日向子 | 秋田市立日新小学校 |
| 児 玉 陽 香 | 由利本荘市立矢島小学校 |
| 渡 部 ひなた | 由利本荘市立由利小学校 |
| 瀬 戸 香 恋 | にかほ市立院内小学校 |
| 佐 藤 朝 香 | 横手市立山内小学校 |
| 仲 谷 紗 希 | 北秋田市立合川中学校 |
| 石 井 凜 | 能代市立東雲中学校 |
| 福 島 美 羽 | 五城目町立五城目第一中学校 |
| 新 田 桜 子 | 由利本荘市立東由利中学校 |
| 土 門 彩 華 | 県立雄物川高等学校 |
| 小 林 寛 果 | 県立能代支援学校 |



新規採用者研修にて

支 部 長

- | | | |
|--------|---------|--------|
| 鹿角 | 安 保 真 美 | 八幡平小学校 |
| 大館北秋田 | 小 林 美恵子 | 第一中学校 |
| 能代山本 | 佐々木 良 子 | 八峰中学校 |
| 男鹿潟上南秋 | 柏 木 明 香 | 出戸小学校 |
| 秋田 | 伊 藤 晃 子 | 御野場中学校 |
| 本荘由利 | 今 野 千加子 | 仁賀保中学校 |
| 大曲仙北 | 古 村 香 | 大曲中学校 |
| 横手 | 佐 藤 富喜子 | 横手北中学校 |
| 湯沢雄勝 | 鈴 木 了 子 | 山田小学校 |

県高等学校連絡会代表者

- | | | |
|---------|---------|--------------|
| 代表 | 工 藤 結 子 | 秋田西高等学校 |
| 世話人 | 細 井 涉 夢 | 六郷高等学校 |
| 鹿角大館北秋田 | 木 村 晶 子 | 大館国際情報学院高等学校 |
| 能代山本 | 中 田 香 | 能代高等学校 |
| 男鹿潟上南秋 | 櫻 庭 早由利 | 男鹿海洋等学校 |
| 秋田 | 加 藤 俊 子 | 秋田北高等学校 |
| 本荘由利 | 和 田 静 香 | 西目高等学校 |
| 大曲仙北 | 木 村 英理子 | 大曲農業高等学校太田分校 |
| 横手 | 菊 池 麻 紀 | 平成高等学校 |
| 湯沢雄勝 | 寺 田 茜 音 | 羽後高等学校 |

役 員

- | | | |
|------|---------|----------|
| 顧 問 | 佐 藤 素 子 | 秋大附属小学校 |
| 会 長 | 渡 部 有紀子 | 金足農業高等学校 |
| 副会長 | 高 橋 雅 子 | 雄和小・中学校 |
| 副会長 | 工 藤 結 子 | 秋田西高等学校 |
| 幹 事 | 加 藤 真理子 | 五城目小学校 |
| 会 計 | 幸野谷 ひろみ | 秋大附属幼稚園 |
| HP担当 | 柴 田 智 子 | 本荘高等学校 |
| 理 事 | 佐 藤 繭 美 | 太田中学校 |
| 理 事 | 大 高 彩都子 | 湯沢高等学校 |
| 理 事 | 細 井 涉 夢 | 六郷高等学校 |
| 監 事 | 橋 本 啓 子 | 桂城小学校 |
| 監 事 | 加 藤 葉 子 | 視覚支援学校 |

【編集後記】

令和7年8月・9月の大雨で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

今回の研究実践では、テーマ別グループの全員が共通の目的意識をもちながら取り組みました。柔軟にアイデアを出し合えたことで、とても充実した時間となりました。得られた成果の一部を今回「養護」に掲載することができました。執筆・編集に携わってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

多様化する健康課題への対応や保健室業務の効率化についても、これまで以上に私たち自身の意識の見直しが求められていると感じます。変化の激しい時代の中で、日々新たに学び合う姿勢を大切にしながら、皆で前進できる関係性を築いていきたいと思っています。

(高階 桃子)